

寺田寅彦全集

第十五卷

寺田寅彦全集

第十五卷

寺田寅彦全集 第15卷 (全17卷)

1961年12月7日 第1刷発行 ©
1979年2月14日 第8刷発行

¥800

著 者 寺 田 寅 彦

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所 株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

書
簡
一

目次

明治三十六年	七
明治三十七年	九
明治三十八年	一一
明治三十九年	一二
明治四十年	一四
明治四十一年	一六
明治四十二年	二〇
明治四十三年	四四
明治四十四年	五三

明治四十五年・大正元年	五六
大正二年	五八
大正三年	五九
大正四年	六〇
大正五年	六二
大正六年	六九
大正七年	七八
大正八年	八五
大正九年	九〇
大正十年	一九
大正十一年	三九
大正十二年	六一

大正十三年 一八九

大正十四年 二〇三

注解 二二一

後記 二三五

明治三十六年

二月二十八日 土 小石川区原町一六塩谷方から熊本第五高

等学校、別役亮へ〔封筒なし〕

このあいだは久々にてお手紙拝見、御健在の趣承知、
安心いたし候。

竜田口の石地藏昔のままのお姿にてましますとも、小
生がお暇申してより四年の秋風に吹かれて定めなき人
の世の離合集散を大慈の眼に何とか見たまいつる。古
きおなじみの柏木の媪も九十の坂越えては朝夕〔二三
字不明〕手向けも怠りがちなるべし。
増田とはどのあたりにや。以前国沢のいたうちではな
いかとも思われ候が、大聖寺の馬場の西か東か。

厭世は罪惡に候。しかし楽天とはのんきでなまける事
ではないかと思ひ候。いたずらに過去に悔やみ将来を
狐疑して現在を怠るも不可。過去を顧みず将来を慮
らざるも不可。過去を悔やみ将来を恐るるがために現
在に忠実なるはやや可。過去を省みず、将来を慮らず
現在に忠なるは可。最可なるものはいかん。

このごろ余暇にエリオットの「アダムビード」を読み
候。その一節に、大工なる主人公の言葉に「責任以外
の仕事をする者、たとえば暇な時に妻のためにパン
籠をこしらえてやったり、また芋を一つ作るかわりに
二つ作る者は天に向かつて一步を進める」という意味
の句あり、おもしろいと思ひ候。からだの弱い者は弱
い者だけ、知力の乏しき者なればそれだけの天職があ
る。からだが強く、知力の有り余る者で忠実でない
者はすでにすでに大失敗である。弱くても愚かでも
bestを尽くす者はすでにすでに大成効にして大いな

る神へのささげ物であると思う。いわんやからだは養生すれば強くなり知力も研げば増すものではあるまいか。よしや自身が盲目になり、あるいは他の不具になっても、大なる成効は得られぬ事はない。病床の上に横たわって世界を動かす事も不可能ではない。盲目のニュートン^{*}はいかん。肺子規^{しき}はいかん。ワットだって病身なためにあんな発明ができたというじゃないか。あまりにSentimentalismに過ぐるは不可。新日本の国民は向上的なるべし。

きょうはいろいろ理屈をならべ候。御笑覧の上妄言^{ぼうげん}の罪おゆるしくだされたく候。

二学期の試験も近よりしなるべし。ちようど試験中に拝聖庵^{はいしょうあん}の桜が咲くのでノートを持って夕方ぶらぶら出かけた事もあった。都の桜は四月後でなくては咲くまい。

小松^{こまつ}の宮様の御葬式は立派であった。いつか宮が熊本^{くまもと}

へおいでになった時学校へお立ち寄りになり、その節門内で御送迎申し上げたおり自分の制服のズボンが破れておったから後列へかくれておがんだ。今度も同じく破れたズボンでお棺を見送った。

三年になってから午後も全く実験につぶされ、夜は晴れなれば天文の実習、あれやこれやで没趣味な生活ばかり送っている。しかし、古い八角堂^{*}の中でクロノメートルを数えながら天体をのぞくのもまた風流。こそけれの歌読みなどの到底解する事のできぬ詩趣がないでもない。首巻^{くびまき}きに首をうずめて、仕事をやめて梅見などに出かけるような没趣^{めつそ}〔味〕な事はない。

まずは右まで。草々

二月末日夜

寅日子

亮殿

明治三十七年

五月三十一日 火 午前十一時二十分 小石川区原町一六塩

谷方から本郷区駒込千駄木町五七、夏目金之助へ〔はがきを横にして能の「景清」のスケッチあり。ペン画〕

〔絵のかぎ形のくぼみの下に〕

昨日はおかげ様にてたいへんおもしろいものを見候。

今夜思い出してこんならく書きができ候ままお目にか
け候。どうしても見てかかねばだめに候。

右まで。

寅

十一月三十日 水 午前十一時(以下不明) 小石川区原町一

六塩谷方から山形市歩兵第三十二連隊補充大隊第四中
隊第十三班、桑木或雄へ〔はがき〕

謹啓 その後は御無音にのみ打ち過ぎ、申し訳もこれ
無く候。ますます御勇健御勤務の御事と大賀至極に存
じ候。下って迂弟相交わらず無事音又などいじりおり
候間、御安心くされたたく候。」大学の池のまわりも
おいおい冬枯れの景色にかわり行くさまにて十七文字
の好時節となり候えども、その気にもならず候。」東
京も別に変わった事もなく候。昨夕富坂を通りかかり、
砲兵工廠を見おろして暫時ぶらつき候。青白い物すご
いアークの光はしめった重い夜の空気を浸している中
に、大きな煙突が怪物のように突っ立って、その下の
建物には血の色をした炎がひらめき、大小高低数限り
ない金属のふれ合う音と、深い沈んだダイナモの音な
どが一種の音楽のように聞こえ、しかもそれは白露戦
争の大悲曲を奏しているように聞こえ申し候。」今夜

はニュートン祭の幹事がたずね参り、材料を供給せよとの強硬談判にて閉口いたし候。」先日の「ネチユア」御落掌くだされ候事と存じ候。その後のぶん取りまとめ近日御送付申したくと存じおり候。」近ごろは痛快な号外もなく、なんだかさびしい事に候。

まずは右お伺いまで。時々手紙をあげたいと思うてもついつい御無沙汰ばかりいたしおり候。

十一月二十九日夜

明治三十八年

十月三十日 月 午前十時四十分 小石川区原町一六塩谷方

から芝区琴平町二朝陽館、野間真綱へ〔絵はがき 自筆ペン画 女の上半身、表の署名に「寅日子」とある。〕

〔絵の下に〕

これは狸たぬきでもなんでもない普通の人間をかくつものところ、しくじってこんなになり候。御勘弁くだされたく。」青春病におかかりの由、小生もおりおりそんな時があるが、そういう時にはなるべくめかして窮屈な服を着て、一日人の集まる所をぶらぶら歩き、ついに得るところなくがっかりして下宿へ帰り、風呂へ飛び込んで頭から湯を二三杯かけるとすっかり全快いた

し候。うそだと思えば試みにやっごらんなさるべく候。

十月二十九日夜

明治三十九年

韓国兼二浦第一銀行支店、間崎純知(当時道知)へ

〔絵はがき〕

バイオリンを注文するならやはり京橋区竹川町の共益商社がよいかと思う。一度はがきをやって代価表を取り寄せたまえ。鈴木製の参拾円のならかなりよい。また独案内の本はいろいろある。原書ならホームマンの一がよい。その他のものも入用なれば買って送っても、また代価を調べて送ってもよし。余事後便にて。

六月二十日

寅彦

竹崎もいよいよ煙草屋の腰弁になった。

きれいなおはがきありがとうございます。君の傑作まだ拝見いたしません。ぜひ見たいと思っています。一昨日先生の所へ行ったらちようど橋口さんが文集の扉絵の版下を持って来て拝見しました。実にきれいです。うまいものです。僕の「竜舌蘭」でもあのくらいのおさし絵を入れればきっと評判になりますよ。

二月二十六日

寅ひこ

六月二十一日 木 午後五時―六時 小石川区原町一二から

「あらし」をほめてくださってありがとうございます。この絵はちょっといいでしょう。さびしいでしょう。右のほ

十月七日 日 午前八時―九時 小石川区原町一〇から本郷区本郷六ノ二五藪中方、野村伝四へ〔絵はがき 着色ペン画石版刷り。夕暮れの冬木立ち〕

うに鴉からすを二三羽飛ばしたらどうでしょう。月並みになるかしら。

十月六日

寅坊

野村先生へ

二伸 私は十番地へこしています。

十月十二日 金 小石川区原町一〇から赤坂区青山高樹町三

玉川館、別役亮へ〔絵はがき〕

今夜早々国へ手紙を出して転地の事をすすめておいた。毎日退屈の事と思う。古雑誌でも送ってやろうか。

「少年新聞」がまた次を注文してよこした。今度は何を書くか勘考中。また雨。松木君まつきのこのあいだのロングフェロー*を思い出す。

十一月一日 木 午後零時―一時 小石川区原町一〇から本

郷区本郷六ノ二五藪中方、野村伝四へ〔絵はがき 中
沢弘光筆、美人爪弾つまびきの図案。署名の「寅」に虎とらの顔
の輪郭が施してある。〕

この絵はただ見てはまさに半文の価もないが、試みに
夜長の燈ともしびに照らして見たまえ。歓声ともしびわき弦歌流るる不
夜の境となる。その楽言うべからず。

寅

思ふ事の空にくだくる花火哉かな

明治四十年

六月二十日 木 午前九時—十時 小石川区原町一〇から本

郷区森川町一小吉館、小宮豊隆へ〔はがき〕

先日はおはがきをありがとうございます。先生も「虞美人草」の培養にお忙しくて当分面会謝絶の由。いっさい謝絶は大いに振るっている。僕らにとってはちっと困るがどうもしかたがない。先生の外出でも待ち受けて話でもするよりほかはない。」僕も大いに忙しいが幸いに面会謝絶などという必要はない。つまり一日宅うちにいないからだれも尋ねて来る人がないので。先生もどこか閑静の地へ旅行でもなさればよいと思います。「二十三日から「虞美人草」がいよいよ見られる由、大いに

楽しみにして待っている。しかしさし絵が例の俗悪なやつではおもしろくない。だれか新派のを入れるように新聞へ請求したいではありませんか。

六月十九日夜

七月七日 日 午後三時—四時 小石川区原町一〇から福岡

県京都郡犀川村、小宮豊隆へ〔絵はがき 泣いている外国の小児〕

毎度ありがとうございます。君は国へ帰ってさびしいと言う。僕は去月三十日に老母と子供を国へ帰した。同時に学校は休みになる、暇になるといっしょに家の内が急に静かになったので無限のさびしさを覚える。赤ん坊の泣くのがやや心を引き立たせるばかりだ。

七月七日

寅彦

先生は忙しそうだから遠慮してめったに行かぬ。どこも話しに行く所がない。宅うちにいてもしかたが